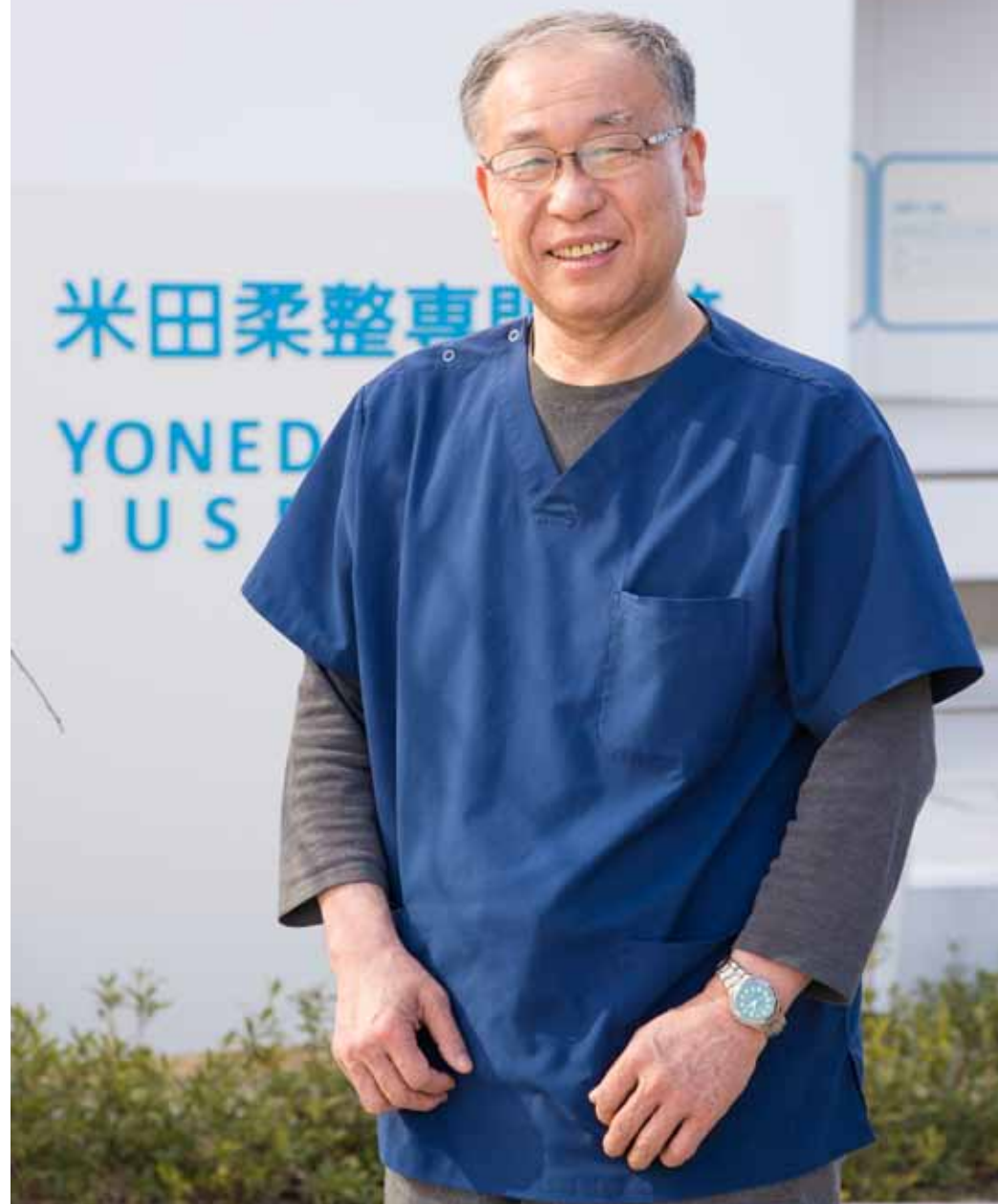


スポーツ経験を活かし、生涯スポーツに関わりながら働くことができる職業、「柔道整復師」。第1回は米田柔整専門学校の学長であり、米田病院院長でもある整形外科医の米田實先生に、柔道整復師とスポーツとの関わりについて話を伺いました。

スポーツの現場で必要とされる医療人

私がバルセロナ・アトランタ五輪で、柔道日本代表選手のチームドクターとして活動した際、同じチームで行動していたアスレチックトレーナーの働きは今でも印象に残っています。整形外科医である私は選手が大きな怪我をしたときに治療をするだけですが、アスレチックトレーナーの彼はテーピングや試合に出るためのコンディショニングなどをすべて担っていました。医師の治療後のリハビリやケアも行い、より近いところでアスリートを支えていると感じました。彼もそうだったのですが、実は現在日本で活躍するスポーツトレーナーの多くは柔道整復師の資格を取得しています。現に本校にもトレーナーを目指す学生がおり、トレーナーとして働く上でのスキルアップとして本校で資格を取得し、卒業後プロチームの専属トレーナーとなった例もあります。

柔道整復師は、柔道の力の使い方を医療に活かすという発想から生まれ、スポーツにおいては脱臼・骨折の応急処置、捻挫肉離れなどの軽度な怪我に対する施術、治療後のリハビリなどを専門としています。解剖学や生理学、運動学、アスレチックリハビリテーション学など高度な医学知識を必要とする国家資格であるとともに、日本の制度においては医師以外で唯一、接骨院などの開業権や一部の治療・施術、また保険の取扱いが認められていることから、トレーナーの活動に有利に働く現状があります。



米田 實

昭和47年東京医科歯科大学医学部卒業。昭和52年名古屋大学大学院医学系研究科博士課程修了。米田柔整専門学校 学長 / 米田病院 院長。日本整形外科学会 整形外科専門医、日本整形外科学会 リウマチ認定医、日本整形外科学会 スポーツ認定医、日本整形外科学会 運動器リハビリテーション認定医、日本整形外科学会 公認スポーツドクター

医学の知識と コミュニケーション能力で スポーツの現場を支える。

整形外科医から見た 柔道整復師という存在

整形外科医院と接骨院(柔道整復師)は競合する関係でもありません。愛知では上手く連携をとれている事例が多いですが、商売敵となる場合もあるでしょう。医師の視点からみた柔道整復師の利点は、患者とよりコミュニケーションがとれる存在であるということです。整形外科の場合、医師は診察と治療をしますが、治療後のリハビリやケアは理学療法士や看護師の役割です。柔道整復師はその役割がある程度一人で担うことができるため、常に手当・施術を通して患者と交流しながら、マンツーマンで信頼関係を築くことができます。

また、私が医師としてこれまで実感してきたことは、実際の医療現場では高い知識と技術にもまざるコミュニケーション能力が必要とされているということです。医師・看護師・理学療法士・薬剤師などさまざまな医療従事者と意思疎通をしなければならぬチーム医療の現場ではもちろん、地域医療においても、患者とのコミュニケーション能力に優れた医療人がこれまでも名治療

者と呼ばれ地域に貢献してきた経緯があります。スポーツの現場においても医療人のコミュニケーション能力は求められており、柔道整復師はそれに長けた存在だと言えます。

スポーツ経験が コミュニケーション能力を育む

柔道整復師がコミュニケーション能力に長けている理由は、その職業の由来に関係して

います。柔道をはじめとする人とぶつかり合うコンタクトスポーツでは常に危険が内在するため、柔道整復師は柔道の実技を通じた学びのなかで、相手の痛みを自身の身体で経験します。また、同時に力の使い方や相手との非言語のコミュニケーションスキルを身につけ、これが医療の現場でも役立つスキルとなるのです。

柔道のみならず、他のスポーツ経験も柔道整復師にとっては大きな財産となり得ます。例えば、接骨院を開業する際、専門のスポーツ分野があれば院の強みとなるでしょう。また、日本ではまだトレーナーの地位が低くはありますが、2020年の東京五輪に向けて行政などの関心も高まっており、最近では学校教育や地域のスポーツ大会などでもトレーナーとして柔道整復師が起用される機会が増えてきています。今後、さら得意分野を活かして働くチャンスが出てくるはずです。



米田柔整専門学校では質の高い教員による指導、米田病院との連携により、医師と対話ができる柔道整復師を育成しています。